

# 学会報告

## 平成14年度 日本農業経営学会 研究大会

鈴村 源太郎

2002年10月11日より3日間の日程で、平成14年度日本農業経営学会研究大会が岡山大学にて開催された。

本年度研究大会におけるシンポジウムは昨年度からの継続メインテーマ「循環型経済社会の構築に向けた農業ビジョン」のもとに構成され、サブテーマは「その推進条件と農業経営研究」とされた。昨年度のサブテーマは「農業経営の社会的責任と主体間連携」であり、報告は「地域循環システムの設計、都市廃棄物の再利用、農業経営における資源再利用の取組に関するものであった。昨年の議論を一言で要約するならば、有機性資源の再利用のあり方に関する課題を整理したものであったと言える。

これに対し本年度は、いわば有機性資源の再利用に関する実際的な課題、すなわち現実の制度設計や運営条件などが論点とされ、農業経営学がそうした課題といかに対峙すべきかが問われた。

さて、以下では、報告の内容を掻い摘んで説明しようと思う。第一番目の富岡報告『循環型農業の条件整備と政策』は、「循環型社会」の概念について二重の循環形成を機軸に概念整理を行い、いわゆる「自然の循環」を考慮しない「リサイクル論」からの不可逆的な展開に論及する。その上で循環型農業の課題として追求すべき課題を挙げ、有機性資源とりわけ栄養物質循環の推進に際し必要とされる政策課題と問題点を論じている。

第二番目の菅原報告は『循環型農業と消費者向け情報公開』と題して、農産物の生産および流過程におけるトレーサビリティ（traceability：追跡可能性）システムの技術的課題を明らかにした。昨今、トレーサビリ

ティシステムは、農産物の生産・物流へ付加的な信頼性を付与するインフラとして注目され、循環型農業への応用も期待されている。しかし、農業経営学的視点に立てば、トレーサビリティシステムは生産技術や経営管理手法の独創性、企業秘密性に重大な課題を突きつけていることに注意が必要であろう。

第三番目の新山報告『農業関連産業をめぐる物質循環と総合マネジメントシステム』は、BSEに端を発した食料安全危機問題に関して、牛の物質循環の中でもとりわけ垂直的循環における構造問題を明らかにした。また、リスク管理のあり方が、品質、安全性、物量・エネルギー、トレーサビリティの観点から分析されている。その上で、リスク管理を考慮した物質循環およびそれら複数循環の連携の必要性が示唆され、EUを参考とした農場から食卓までの垂直的製品管理システムに環境制御の観点を加えた将来像が提起された。同時に我が国の課題として、第三者的な指導、調整機構の必要性が指摘された。

そして第四番目は、高橋報告『有機農業経営の実践とその評価方法』である。前三報告とはやや異質な感があるが、高橋報告はこれまでの有機農業経営の分析・評価が、「効率性」、「競争性」の観点からのみ行われてきたことに疑問を呈し、「人間性」、「社会性」観点からの評価基準を編み出すべきことを提起している。報告は、有機農業が抱える生産性や生産構造面の課題に対し、四つの評価フレームワークがいかに機能するかを検証した。試論的研究として興味深く、今後の経営研究の大きな足がかりとなる成果であった。

以上四報告に対し、佐藤豊信（岡山大学）、小池恒男（滋賀県立大学）、甲斐論（九州大学）、津谷好人（宇都宮大学）の各氏よりコメントがなされ、その後、輸出入と国内物質循環の関係、第三者機関によるトレーサビリティ認証の実現性、物質循環を積極的に推進する経営サイドの倫理性の問題などについて活発な議論が展開された。